

TOMODACHI Women's Empowerment Program 2025 参加者紹介

名前： 岩波理桜
所属： 中央大学国際経営学部
出身地： 長野県



私は将来、日本企業の海外進出支援や海外企業の誘致を通じて、日本の産業の魅力を世界に発信し、地域の活性化に貢献したいと考えています。そのためには、自ら行動し、周囲を巻き込みながら進めていくリーダーシップが必要だと感じています。現在、私の身の回りには女性のリーダーが少なく、具体的なロールモデルを持っていません。そのため、社会人女性が対面でメンターとなってくださるこのプログラムへの参加を決意しました。また、このプログラムを通して、今度は私が誰かのロールモデルになれることを目指しています。社会で活躍されている女性とお話させていただくことで、リーダーシップを学び、自分の将来のリーダー像を確立し、キャリア形成の仕方や努力の方向性について考えたいです。また、同じくリーダーを目指す女性とのコミュニティの中で、様々な考え方や目標に触れ、自分の視野を広めたいと思っています。

このプログラムの内定通知を見たときは、嬉しさもありましたが大変驚きました。面接では英語力の問題でうまく話せない場面もあり不安だったため、選んでいただけて信じられない気持ちでした。選ばれたからには全力で取り組み、このプログラムで自分にできる最大限の学びを得られるようにしようと決意しています。いただいた貴重な機会を通して、ぜひ、自分がリーダーになるにあたっての長所を伸ばし、短所を克服し、社会でご活躍されているメンターの皆様からリーダーとしての在り方を学びたいです。また、他の参加者の方たちとも交流をし、様々な考え方を得て自分の成長につなげたいと思っています。ちょうど9月からゼミが始まるので、そういった場面でも学んだことを実践していきたいです。選んでいただいたことへの感謝を忘れず、将来自分がサポート側に回れるくらい多くのことを学べるよう、真摯にプログラムに取り組んでまいります。

名前： 小枝妃花
所属： 北海学園大学法学部政治学科
出身地： 北海道



本プログラムに応募したのは、日本のジェンダー格差を海外の視点で学び、改善策をつかみたいからです。両親の離婚後に母子家庭になりその中で、ひとり親世帯の貧困率が約 5 割ということ、男女賃金格差の大きさに衝撃を受け、女性支援への志を抱きました。高校時代から市議会議員事務所インターンやゼミでの政策提案に加え、女性シェルターや DV 加害者更生プログラムを訪問し、スタッフに取材するなど“現場の声”を最重視した一次情報収集を続けています。さらに国内留学で家族法・ジェンダー論を履修し、多様な価値観に触れて自らの無意識バイアスを自覚しました。海外渡航は旅行のみで、学びを目的とする渡航は初めてです。英会話はまだ得意ではありませんが、現地で質問し議論できるよう学習を重ねています。本プログラムで得た知見と国際ネットワークを、将来立ち上げる女性の生活向上プロジェクトに活かし、日本のジェンダーギャップ解消に貢献します。

選出の知らせを受けた瞬間、手が震えるほど驚きました。書類では想いをのせられた自信があったのですが、面接では英語力不足のため思いを伝え切れませんでした。悔しさが残り、可否発表まで毎日英語で話す練習を続けてきました。その間、落ち込む私を励まし、英会話練習に付き合ってくれた家族や友人に合格を報告できたことは本当に嬉しかったです。同時に、選んでくださった皆さまの期待を超え、良い意味で驚かせたいという強い決意が芽生えました。渡航までに英会話力をさらに鍛え、現地では積極的に質問し、得た知識とネットワークを日本へ持ち帰ります。選んでいただいた責任を胸に、結果でお応えします。

名前： 大谷千夏
所属： 法政大学社会学部社会学科
出身地： 滋賀県



女性の社会進出やジェンダー平等を妨げている課題に「気づく」力と、そこから解決に向けて周囲を巻き込むリーダーシップを身につけたいという思いで応募しました。

日本のジェンダー課題は、その多くが社会制度などによって構造的に作られている側面があると考えています。そのため、たとえジェンダー不平等を内包していたとしても、それが「当たり前」として捉えられ、そもそも課題として認識することに難しさがあると感じています。

そうした課題を課題として正しく捉える力、つまり「気づく」力をこのプログラムを通じて身につけたいと考えています。また、このプログラムでは、女性のエンパワーメントに関心のある、それぞれに関心と視点を持った多様な方々と出会えることと思います。自分にはない考え方や価値観に触れながら、そこにある濃淡を見つめ、思考を更新し続けることで、将来ジェンダー課題に最前線で取り組める人になりたいと考えています。

通知を受取った時は、自分と同じようにジェンダー課題に取り組みたいという気持ちをもつ方々にお会いできる嬉しさと、深く学ぶ機会を得ることができたことへの感謝がありました。その一方で、英語で複雑な社会課題を語ることの難しさや、日々ニュース等に触れる中で痛感するジェンダー課題への知識の不足について、より力を入れて学習に取り組む必要があるとも感じています。自分がジェンダー課題についてどのような考えや価値観をもっているのか、日本語でも英語でも、細やかなニュアンスを含め伝えられるようになりたいと考えています。プログラムを通じたたくさんの方との出会いはもちろん、対話や体験を通じて生まれる新しい自分の考えや価値観との出会いも、とても楽しみです。よりよい社会の実現に貢献できる人になれるよう、より一層学びを深め、プログラムをより実りあるものにしたいと感じています。

名前： 佐々木來那
所属： 慶應義塾大学総合政策学部
出身地： 神奈川県



私は、高校の授業で男女不平等について議論した際、日本のジェンダー・ギャップ指数が 146 力国中 125 位、G7 で最下位であることを知り、大きな衝撃を受けた。さらに、順位が何年も改善されていないことに落胆した。しかし、私の通う女子校では多くのクラスメイトがこの問題に無関心であった。私たちは本当に男女不平等を「自分ごと」として捉えているのだろうか。私は生徒会長として他校の生徒会と関わる機会が多くあったが、共学校で女子の生徒会長に出会ったことがないことにも違和感を覚えた。こうした経験から、私は性別に関係なく誰もが自分らしく生きられる社会を作る必要性を強く感じるようになった。このプログラムでは、日本の女性リーダーからの学びと初めての海外挑戦を通じて、グローバルな視点を身につけ、私自身のリーダーシップをより柔軟で共感力のあるものへと成長させたい。そして、誰もが輝ける社会の実現に貢献したい。

日本の女性リーダーから直接学び、ジェンダー平等に関するグローバルな視点を得られる貴重な機会であるこのプログラムに参加できることを大変嬉しく思う。日本におけるジェンダー不平等は依然として根深い問題であるが、私は特に若い世代への教育がその解決の鍵になると考えている。私は、高校生の時、生徒会長として近隣の男子校と協力し、「お互いを知ろう」という対話イベントを企画した。両校から 80 名以上が参加し、「自分が無意識に異性に偏見を持っていたことに気づけた」という声もあった。この経験から、相互理解と教育の重要性を実感した。私は、自分が得意なことである、イベント企画や他者との交流を通じて、異性に関する誤解や偏見を減らす小さな助けになれると信じている。このプログラムを通じて学びを深め、将来は日本で男女平等を推進する女性リーダーとして活躍したい。

名前： 佐々木美茄
所属： 神戸市外国語大学英米学科
出身地： 大分県



私がジェンダー平等への問題意識を持ったきっかけは、大学の授業で日本には女性の政治家が少ないという事実を知ったことです。また、予備自衛官として多様な経験を持つ人々と関わる中で、実際の仕事の場におけるジェンダーの不均衡を体験しました。この経験から、制度や組織のトップに立つリーダーの意識が現状を変えるために重要だと強く感じています。私は将来、他国との関係を鑑みつつ日本の未来を形作り、社会の仕組みをより良く変える人材になりたいと考えています。そのためには、まず日本における女性のリーダーシップのあり方を理解し、どのようにして日本の社会に適応させていくべきかを学ぶ必要があると感じています。実際に活躍するメンターやアメリカでの研修を通して、女性のリーダーシップを促進するための知見を得ることができればと思っています。また、同じ志をもつ仲間と切磋琢磨し、自身の将来の一步を踏み出したいと考えています。

内定通知を受け取ったとき、言葉で言い表せないほど驚いたことを覚えています。すぐに現実のことだとは理解できず、受け取ったメールを何度も読み返して、少しずつ選ばれたことを実感しました。まず初めに両親に選ばれたことを伝え、喜びを共有しました。選ばれたことを知った時信じられない気持ちとともに、身が引き締まる思いでした。このような貴重な機会は二度とないかもしれないと感じています。だからこそ、与えられたこの機会に感謝するとともに、このプログラムを通して出会う人々、その人たちとのつながり、学びの一つひとつを大切にしたいです。また、そこで得た経験を糧に、自分自身を成長させ、将来日本の社会に貢献できるように努めていきたいと強く思います。

名前： 坂本真奈美
所属： 九州大学共創学部
出身地： 福岡県



中学生の頃に進路選択をする際に、先生に「女の子だから文系でいいと思うよ。」と言われたことをきっかけに、ジェンダーの不平等に関心を持つようになりました。その後も、生理が原因で高校の推薦が危うくなるなど、性別によって選択肢が狭まる経験をしたことで、自分にできることを考え続けてきました。高校では、痴漢被害の経験をもとに英語スピーチを行い、ディベート大会や海外連携プログラムにも積極的に参加しました。このような活動を通して、自分の言葉で社会に声を届ける力と責任を学びました。TOMODACHI プログラムでは、異なる背景を持つ仲間と共に学び、対話を重ねる中で、新たな視点と行動力を育みたいのです。将来は、生理の貧困やジェンダー格差といった課題に対し、政策や教育の面から変化を起こす人材になりたいと考えています。

選出の知らせを受けたとき、驚きと喜びで胸がいっぱいになりました。これまで感じてきた違和感や悔しさが、言葉と行動に変わり、評価されたことに大きな意味を感じています。自分の経験は小さなものかもしれませんが、「同じような思いをする誰かの背中を押す力になれるかもしれない」そんな思いが、今回の選出によってより強い確信へと変わりました。プログラムを通じて、自分の中にある問いを深めながら、多様な仲間たちと学び合い、視野を広げていきたいです。そして、個人の体験を社会課題として言語化し、次の行動につなげていく力を養いたいと思っています。未来の変化の芽を見つけ、育てていけるような学びの時間にしたいです。

名前： 関野綾音
所属： 名古屋市立大学情報環境デザイン学科
出身地： 愛知県



私の将来の目標は、ゲームディレクターとして社会問題を啓発する作品の制作を通じ、機会格差を改善し、世界中の人々を笑顔にすることです。機会格差の大きな一因が、男女格差です。ゲーム業界で女性が占める割合は CEDEC の調査によれば、たった 13% です。だからこそ、ゲームやメディアのもつ、人の価値観を形成するという力を活かして男女格差に取り組みたいと思い参加しました。私は、今まで様々な分野で活動を行ってきましたが、その中で私が痛感したのは、リーダーシップをとる女性のロールモデルが少ない、またリーダーという役割は心理的なハードルが高いと感じる場面が多いということです。ですが、リーダーには他者を牽引するだけでなく支えるという側面もあります。だからこそ、私はこのプログラムで成長しながら他者を支える力を養い、メディア制作を通じ機会格差の是正に尽力し、私自身が誰かのロールモデルとなる存在を目指したいです。

私は、以前から TOMODACHI イニシアチブのプログラムに参加したいと常々思っていたので、その一員になれたということを光栄に思いました。私の男女格差をゲーム制作という側面から解決したいという思いは、独特かもしれないと考えていたので、自身の熱意が認められたということも含めて嬉しかったです。また、内定通知を受け取った際は、信じがたいという気持ちと共に、自分が選ばれた意味や責任を真剣に受け止めプログラムに臨んでいこうと強く思いました。このプログラムでは、半年間メンターの方や同じ志を持つ仲間と共に切磋琢磨することを通し、リーダーシップを磨き、視野を広げることができると思います。ですが、それだけでなく、ここで得るであろう代え難い絆や貴重な経験を自分の中で終わらせるだけでなく、他者に還元しつつ、更に成長できるように積極的に出来る限り沢山のことを学んでいきたいです。

名前： 関屋里衣
所属： 法政大学社会学科
出身地： 東京都



未だに女性の社会進出には壁があると感じたからです。記者を志し、いくつか活動をしている中、あるテレビ局女性ディレクターの「企画を通すには男性上層部をまず納得させねばならない」との言葉でその壁を痛感しました。実際私も、塾講師のアルバイトで、同期は私を含めて7人で、うち女性は私のみです。同世代にも関わらず「奥さんには家にいてほしい」「女は愛嬌だけで優遇されていいよな」などの言葉を幾度も耳にしてきました。女性だからではなく、一人の人間として、男性と対等にキャリアを築ける、そして自分たちの声がきちんと届く、そんな社会にしたいと思いました。このプログラムを通して、あらゆる視点で意見が聞けること、実際にキャリアを築き前線で働いている女性の声を聞けること、とても楽しみにしております。ここでの学びを、私たちの中で完結させることなく、将来記者としても広く発信し、活かしていきたいです。

内定通知を受け取った時は、嬉しさのあまり泣き崩れてしまいました。これまで、女性がキャリアを築くことや、女性の社会進出について、心ない言葉を言われたことは数え切れません。それでも、周りの声に流されず、自分の信念を貫き探究や発信を続けてきたからこそ、この結果だと思うと、これまでの日々が報われたようで、とても胸がいっぱいです。そして何より、このプログラムを通して、同じ志を持って奮闘する仲間や、実際に前線で活躍する方々と意見を交換できることがとても楽しみです。ここでの刺激的な議論や、新しい見解などの学びをきちんと吸収して、自分の考えをより一層研磨していきたいです。そして将来記者として、ここで培った学びを、同じように夢を持って進んでいる女性の背中を押すような、寄り添うような言葉として伝えていきます。

名前： 為清亜乃
所属： 大阪大学人間科学科
出身地： 広島県



私が本プログラムに応募した理由は、自分らしいリーダー像を見つけ、周囲の人の成長を支えられる力を身につけたいと考えたからです。特に、子どもたちが多様なロールモデルと出会い、安心して挑戦できる環境づくりに関心があります。その背景には、性別による役割期待に疑問を抱いた経験があります。やりたいことに踏み出せず悩んだ時期もありましたが、先輩や仲間との出会いが、私の意識を大きく変えてくれました。彼女たちはその人らしい姿でリーダーシップを発揮しており、そのあり方に大きな勇気をもらいました。今度は私自身が、誰かの可能性を信じて支えられる存在を目指したいと願っています。

本プログラムでは、多様な背景を持つ仲間と学び合うことで視野を広げ、自分自身のリーダーシップを見つめ直す貴重な機会になると考えています。将来的には、支援が届きにくい人も自然に包み込まれるような、社会の仕組みや文化づくりに携わっていきたいです。

選出の連絡をいただいたときは、参加できることのうれしさと同時に、責任を持って取り組まなければならないと思い、身が引き締まりました。大学生活では自分なりに行動してきたつもりではあるものの、それが本当に誰かの役に立っているのか、自分の目指す方向に近づけているのか、不安になることも多くありました。だからこそ、今回の選出は、そうした迷いや努力が少し報われたようにも感じられました。様々な目標を持つ仲間との出会いが今から楽しみです。いただいた貴重な機会を生かし、プログラムに誠実に向き合っていきたいと思っています。プログラム中は、無理に背伸びしようとしせず、現時点の自分にできることやできないことに真摯に向き合いたいと思います。自分自身の成長を追求することはもちろん、そこで得た学びや経験を将来に活かし、今度は誰かの挑戦を支えられるような存在になって社会に還元していきたいと思っています。

名前： 与那城海夢
所属： 琉球大学国際地域創造学科
出身地： 沖縄県



私は5人きょうだいの長女として育ち、経済的に恵まれない家庭環境の中で、他者を思いやり支える姿勢を自然と身につけてきました。進学にあたって多くの支援を受けたことで、将来は自分も誰かを支える立場になりたいという思いを強くしています。地元を離れ、県外の大学へ進学した経験は、自分自身や日本社会における女性の役割について深く考える機会となりました。現在は編入学という形で地元に戻り、地域に貢献する道について考えています。

TOMODACHI プログラムは、自分の価値観や目標と深く重なっており、自己認識、効果的なコミュニケーション、レジリエンスなどのリーダーシップスキルを育む貴重な機会だと考えています。多様な文化に触れ、包摂的な社会のあり方を学びながら、将来的には困難な環境にある若者、特に女性の可能性を広げる支援をしていきたいです。

今回、TOMODACHI Women's Empowerment Program 2025 の参加者として選出され、大変光栄に思っています。少しずつ実感が湧いてきており、選出された喜びとプログラム開始への期待、緊張感に溢れています。選ばれたことは、私にとって大きな自信となり、同時に身の引き締まる思いです。このプログラムを通じて、多様性を尊重しながら社会に貢献できる、5つのリーダーシップスキルを習得した真のリーダーになることを目指しています。特に米国研修は、国際的な視野を養い自分の価値観や将来像を広げる貴重な機会になると確信しています。また、すでに社会で活躍されているメンターの方々との交流から刺激を得られることも期待しています。この経験を将来のキャリアに生かし、日本と世界をつなぐ架け橋となれるよう努力してまいります。